

お茶の水女子大学附属高等学校 生徒の活動を中心に構築した指導方法を冊子化し共有（東京都）

実施体制の概要

- 全校生徒数：約359名
(うちSGH対象生徒数 全員対象とする)
- SGH対象学科：
全生徒を対象とする
- HP：<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/>
(SGHの活動成果はこちら：
<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/school/search.html>)
- SGH委託費用総額：約4,816万円
(H26 約1,600万円、H27以降 約700~1000万円/年)
- 校内の体制：校務分掌として研究部の3名を中心とし、
全教員が課外活動の引率など濃淡を持ちながら関与
- 国内連携機関：
東京工業大学、東京大学、お茶の水女子大学等
複数の大学や日本IBMなどの民間企業と連携
- 連絡先
stamatani.naoko@ocha.ac.jp
☎03-5978-5856 (代表)

何を目指したか

- 国際協力の伝統のある学校での開かれた学校づくりと、
持続可能な未来の創り手となる女性を育成

ツールのポイント

- 1 SGH開始当初の温度差、3年目での対象の大幅変更などを経て
生徒の課題意識、活動、成長を中心に考えた探究的な学びを体系化
- 2 開かれた学校の雰囲気づくりにも資した学びをステップごとに解説

SGH事業実施に
必要だった資源

- 人員** ■ 中心となる研究部を1名増員し3名の体制を構築、中心となる教員の
授業負担軽減のため非常勤講師を雇用
- 金銭** ■ SGH予算の大部分を海外研修の渡航費・事前学習費用（生徒が
ほぼ無償で行ける環境づくり）に充てる
- 時間** ■ 立ちあげ時は授業を1コマ作ることに数時間かかる他、個別の論
文指導などが必要な際には課外活動の時間も含め膨大な時間が必要。
多忙により、研修時間も不足
- 心理** ■ 開始当初の温度差やSGH実施に伴い減った授業の担当者からの不
満など、一丸となるには、生徒の喜びが見えるまでの期間が必要だった

Plan

ツール作成の背景

- 選択講座の一つとして「ジェンダーと国際協力」などをテーマにしていたが、SGH指
定までは学校全体の取組とはなっていなかった
- 国際協力の伝統校ゆえの閉鎖的な雰囲気もあったが、手探りでの複数大学、企
業との連携をする中で、学校の雰囲気が開かれたものとなる学びを実現
- 研究開発校の役割を果たすべく、開かれた学校の雰囲気づくりにも資した学びを
体系的に整理することに最終年度は注力

SGH事業計画の流れ

指定年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度
全校対象のプログラム			「生徒の負担感」の 声に対応し プログラムを 大幅改正		
選択特化のプログラム				一本化	

Do

ツールの解説

✓ 「生徒と共に作る探究的な学び」冊子 ✓ フィールドワーク行程表、自己評価表

取組概要

- 5年間の集大成を約20頁の冊子とし、学年、
探究ステージごとの取組内容を紹介
- 具体的な探究テーマを紹介するだけでなく、
試行錯誤により得た「探究を成功させるため
の4つのポイント」を掲載

取組概要

- 課外フィールドワーク実施の際に生徒に示す行程
表と、約30の自己評価項目をまとめたシート
- いずれの資料もフィールドワークに「行く」ことが目
的にならず、全体の課題探究の中の要素とし
て生きることを目指す

成果

- 都内近郊の公立高校に無料配布すると共に
HPに掲載。各高校の反応は「探究」のイメ
ジがわき、方向性が見つかったとの声があった
- 民間評価のGPS-Academicの結果、批判
的、創造的な思考力は向上

取組概要

✓ 事業評価アンケート表

- 毎年度の事業成果を確認するため、課題発
見・解決力、論理的な思考力などを生徒に
自己評価させる
- 能力だけでなく、教養に関する指標や、生徒
自身がこの事業全体を評価する指標も設定

Check

取組内容の評価

- 本校の取組の背景には複数大学、民間企業と
の連携があるが、連携先からの「高校生の反応が
知りたい」というモチベーションでネットワークを継続
- 大学教員、企業関係者とも、微々たる謝金でも
協働してくれており、ネットワークが拡大し続けた

Action

指定期間終了後のいま

- 基本的にほぼ同じ形で取組を継続
- 管理機関であるお茶の水女子大学が本取
組を評価しており、新たな資金を提供
- 海外研修については生徒の自己負担分が
増加したが、申込者はほぼ変わらず維持
- 連携先は旅費の問題があり遠方のネット
ワークが維持しにくい